

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第188号

イザヤ 65:1

平成23年5月27日

ひとりの神の人が、主の命令によって、ユダからベテルにやって来た。ちょうどそのとき、ヤロブアムは香をたくために祭壇のそばに立っていた。すると、この人は、主の命令によって祭壇に向かい、これに呼ばわって言った。「祭壇よ。祭壇よ。主はこう仰せられる。『見よ。ひとりの男の子がダビデの家に生まれる。その名はヨシヤ。彼は、おまえの上で香をたく高き所の祭司たちをいけにえとしておまえの上にささげ、人の骨がおまえの上で焼かれる。』その日、彼は次のように言って一つのしるしを与えた。「これが、主の告げられたしるしである。見よ。祭壇は裂け、その上の灰はこぼれ出る。」ヤロブアム王は、ベテルの祭壇に向かって叫んでいる神の人のことばを聞いたとき、祭壇から手を伸ばして、「彼を捕らえよ」と言った。すると、彼に向けて伸ばした手はしなび、戻すことができなくなった。神の人が主のことばによって与えたしるしのおり、祭壇は裂け、灰は祭壇からこぼれ出た。 列王記第一 13 : 1-5

なお彼は、ベテルにある祭壇と、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの造った高き所、すなわち、その祭壇も高き所もこわした。高き所を焼き、粉々に砕いて灰にし、アシェラ像を焼いた。ヨシヤが向き直ると、山の中に墓があるのが見えた。そこで彼は人をやってその墓から骨を取り出し、それを祭壇の上で焼き、祭壇を汚れたものとした。かつて、神の人がこのことを預言して呼ばわった主のことばのおりであった。 列王記第二 23 : 15-16

ソロモンの死後、ダビデ王国はヤロブアムを王とする北朝イスラエルとソロモンの子レハブアムを王とする南朝ユダに分裂しました。モーセの掟に従って、主の例祭のため年三回、エルサレムに巡礼に出かけることによって、北イスラエルの民が統一ダビデ王国に舞い戻ることを恐れたヤロブアム一世は、イスラエルの地の「ベテル」と「ダン」に新たに祭壇を築き、金の子牛を置き、北イスラエルの全部族に巡礼を義務づけ、これらの地をエルサレムでの礼拝に似せたカルト崇拝地としました。神はユダから無名の「神の人」をこのカルト崇拝地の一つベテルに送り、背信の王とイスラエルの民に厳しい非難と裁きの宣告を告げるようにと命じられました。

祭司の職権を侵害し、香をたくために祭壇のそばに立っていたヤロブアム一世に「神の人」は、似非宗教の本山として民を背信に導くベテルの高き所が、祭壇や偽祭司たちもろとも滅びる日が来ることを預言しました。「神の人」の預言は遠未来預言で、後世、南朝ユダのダビデ王家に生まれる「ヨシヤ」という名の王が、偶像崇拜、異端信仰、異端的慣習に汚染された全イスラエルの地から背信を一掃する宗教改革を起こすことをも告げたものでした。三百年後にこの無名の「神の人」の預言はすべて成就しました。

「主の宮（エルサレム第一神殿）」の破損箇所修理中に大祭司が見つけた「律法の書」が王の前で読み上げられたとき、ヨシヤ王は先祖たちの犯してきた恐ろしい背信に気づかされ、即座に衣を裂くや、「行って、この見つかった書物のことばについて、私のため、民のため、ユダ全体のために、主のみこころを求めなさい。私たちの先祖が、この書物のことばに聞き従わず、すべて私たちについてしるされているとおりに行わなかったため、私たちに向かって燃え上がった主の憤りは激しいから」（列王記第二 22 : 13）と、全イスラエルが神に立ち返ることを命じました。御言葉によって内なる霊が覚醒させられた王の命令は、全エルサレムに伝えられ、当時、神の言葉を取り告ぐことで信任の厚かった女預言者フルダの認証を経て、まずユダの地で、民の契約更新が実施されました。「王は柱のわきに立ち、主の前に契約を結び、主に従って歩み、心を尽くし、精神を尽くして、主の命令と、あかしと、おきてを守り、この書物にしるされているこの契約のことばを実行することを誓った。民もみな、この契約に加わった」（列王記第二 23 : 3）のでした。ヨシヤ王の改革はユダからイスラエルの地に及び、冒頭に引用したように、ベテルの祭壇も偶像アシェラも破壊されたのです。

ベテルで改革を陣頭指揮していたヨシヤ王は近くの山の中に墓があるのを知ると、背信のカルト崇拝地を汚すため、墓から骨を取り出させ、背信行為が積み重ねられてきた祭壇の上で焼いた後、すべてを跡形もなく粉砕したのでした。おそらくこのとき祭壇の上で焼かれた骨は、ヤロブアム一世が祭司として採用したレビ族ではない他部族出身の者たちの骨で、祭壇への敬意からその近くに埋葬されていたものでしたが、図らずも「神の人」の預言「おまえの上で香をたく高き所の祭司たちをいけにえとしておまえの上にささげ、人の骨がおまえの上で焼かれる」はヨシヤ王によって成就したのです。このとき王は近くの石碑にも目を留めたのですが、町の人々が、カルト崇拝地に対する神の裁きを告げたその「神の人の墓」であることを告げたことにより、三百年も前に自分のことを正確に預言したその人に敬意を表した王は、その預言者の骨には触れなかったのです。さらにヨシヤ王はサマリヤでも「高き所の祭司たちをみな、祭壇の上ではふり、その祭壇の上で人間の骨を焼く」（列王記第二 23 : 20）という荒療治をして全地を聖めたのです。

ヤロブアム一世に神が無名の「**神の人**」を通して語った預言はこのように遠未来預言で、その信憑性を判断することは当時はできなかったわけですが、しかし、神はその預言が神からのものである証拠として、「しるし」を与えられました。王の目の前で起こった「**祭壇は裂け、灰は祭壇からこぼれ出(る)**」という出来事がそれでした。その後、この預言者の話は、同じ神の預言者でありながら、この若い「**神の人**」に嫉妬した年寄りの預言者がその「**神の人**」に罫をかけ、神の御旨から引き離させるという起こってはならない非劇で閉じられることとなります。しかし皮肉なことに、神の御旨を離れた「**神の人**」が起こった恐ろしい裁きを目の当たりにした、罫をし掛けた当の本人、年寄りの預言者は、その「**神の人**」の語ったことがすべて神からの預言であるという確信に導かれ、無名の神の人のこの預言は確実に成就することとして、後世まで伝えられることになったのでした。

この「**神の人**」の時代から百五十年を経たヤロブアム二世の時代、まだヨシヤ王が生まれる前、神は再びユダから別の神の人を北イスラエルに送られ、重大なメッセージを告げられました。その名は「**アモス**」、ユダの地テコアで、いちじく桑の木を栽培するかたわら家畜を放牧させていた牧者でしたが、主の召名に与り、宗教的、政治的、経済的、道徳的、社会的に退廃していた北イスラエルに遣わされたのでした。ある日、祭壇のかたわらに主が立っておられるのを見たアモスに、主は「**柱頭を打って、敷居が震えるようにせよ。そのすべてを頭上で打ち砕け。わたしは彼らの残った者を、剣で殺す。彼らのうち、ひとりも逃げる者はなく、のがれる者もない。彼らが、よみに入り込んでも、わたしの手はそこから彼らを引き出し、彼らが天に上っても、わたしはそこから彼らを引き降ろす……わたしは蛇に命じて、そこで彼らをかませる……**」(アモス書 9:1-4)と語られました。背信で始まり、背信から神に立ち返ることのなかった北イスラエルに究極的な滅びが訪れることの宣言でした。

ときは、夏の果物の熟した刈り入れ時「第八の月の十五日」。ユダの「主の例祭」に似せて、ヤロブアム一世が勝手に定めたこの「仮庵の祭り」では、北イスラエルの王自ら祭壇に立っていけにえをささげるのが習慣になっていましたが、この日、アモスは、王ではなく、真の主権者なる神ご自身が祭壇に立っておられるのを見ます。神は、ベテルはじめ、ダンから、ギルガル、ベエル・シェバに至るまで領土の至る所に背信のカルト崇拝地の築かれた北イスラエルを絶滅させることをアモスに告げられたのでした。偽物があばかれ、真の神によって打ち砕かれ、取り除かれる日、逃れることのできる者はだれもいないのです。自然の避難所も、超自然的な避難所も、死人が行くところの underworld「シェオル」も、天も、偽りの神々に伺いを立てるカルメル山の「高き所」も、ティアマトやレビヤタンなど海獣の住み家「海の底」もどこも逃れ場にはならず、助ける者も一人としていないのです。裁きの日、すべてを支配しておられる神の御手からだれも逃れることはできないのです。

偽造、模造の人生は、人生の動機が自分自身に向けられていることを物語っています。そこから解放されるには、悔い改めて、真の神の祭壇に来る以外に道はありません。モーセが「**まことに、私が、今日、あなたに命じるこの命令は、あなたにとってむずかしすぎるものではなく、遠くかけ離れたものでもない。これは天にあるのではないから……また、これは海のかなたにあるのではないから……まことに、みことばは、あなたのごく身近にあり、あなたの口にあり、あなたの心にあつて、あなたはこれをおこなうことができる**」(申命記 30:11-14)と教えたように、人は、心を真の神に向けるとき初めて、救いがすでに手の届くところ、そこにあることを知ることになります。北イスラエルに遣わされたアモスは、民の立ち返りを求め、天災、人災を通して忍耐強く警告を発して来られた神が、悔い改めようとしない背信の民をついに異邦人の手に渡すときが切迫したのを知ります。しかし、ソロモン王以降王国が分裂し、ヤロブアム一世がモーセの掟を無視し、神に反逆する宗教組織を制定した直後、見切りをつけた北イスラエルの人々はユダ王国に逃れ、このとき、ヤロブアムの体制下で祭司職を剥奪されたレビ人全員も「**自分たちの放牧地と所有地を捨てて、ユダとエルサレム**」(歴代誌第二 11:13-14)

に移り、このようにして、分裂王国の黎明期にすでにイスラエルの全部族の中から神に献身した者たちはすべて、ユダ王国の傘下に入っていました(『一人<sup>れいめい</sup>で学べるイザヤ書』補注「イスラエルの失われた十部族の神話」参照)。

したがって、ここで神が宣言されたのは、神の民の中の背信分子の取り除きでした。アモス書の先行する七章でアモスの執り成しを聞き入れ、民を滅ぼさないと言われた主が、八-九章で、もう見逃すことのできない罪のゆえに絶滅を宣言されたことに対し、アモスは、出エジプトの出来事を通してイスラエルを贖われた同じ神が、どうして契約の民イスラエルを滅ぼすことができるだろうかと、理解に苦しんだに違いありません。アモスの時代より百五十年前、あの無名の「**神の人**」が預言したカルト崇拝地の滅亡は、アモスがこの神の宣告を受けたほぼ四十年後に、アッシリヤ軍による北イスラエル王国の滅亡という悲劇で現実のこととなったのでした。しかし明らかのように、北イスラエル部族の中の神に従順な「**その心をささげてイスラエルの神、主を尋ね求める者たち**」(歴代誌第二 11:16)はすでに南ユダに移っていたので、この裁きを免れることができたのです。神は最後に、「ふるい」のビジョンを通してアモスに「**見よ。わたしは命じて、ふるいにかけるように、すべての国々の間でイスラエルの家をふるい、一つの石ころも地に落とさない。わたしの民の中の罪人はみな、剣で死ぬ**」(アモス書 9:8-10、下線付加)と、民の中の背信の者だけが取り除かれることを明確にされたのでした。